

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア通信 31

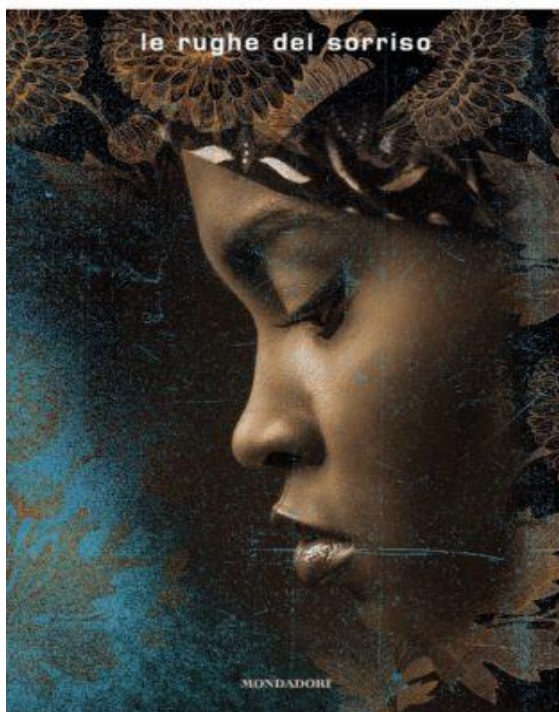
カラブリアの小さなユートピア

深草 真由子

“Come si chiama il paese, Riace?”

リアーチェ。カルミネ・アバーテの最新の小説*Le rughe del sorriso*の後半、エンディングまであとわずかというところで、その村の名が出てくる。

carmine abate

【Carmine Abate, *Le rughe del sorriso*】

語り口だけでなく、使う言語もさまざまな登場人物が物語る、いくつものストーリーが重なりあってできた作品。移住 -emigrazione (出て行くほう) とimmigrazione (入ってくるほう) - をめぐって揺れうごく、人びとの心の声からなる。

核となるのは、カラブリア州のスピッラーチェという町で展開する三十四歳で独身のアントーニオの物語。亡き父がドイツで稼いだ金で建ててくれた大きな家に住んでいる。ところがここは「いい仕事を見つけるのは、宝くじに当たるようなもの」という南イタリアの田舎。母と姉はミラノへ、町の仲間たちも仕事を求めて北イタリアや外国へ出て行ってしまったが、アントーニオはまだ生まれ育ったこの町に残っている。彼のことを昔からよく知る人たちは言う。「このご時世、町を出て行ったとしても、学士さん向けの仕事なんてイタリアじゅうどこを探しても見つからなかっただろうよ。だから仕事が週に数時間しかなくて、月四百ユーロ（約五万円）しかもらえなくても、ここにいるほうがいい。ミラノじゃその二倍、いや三倍、四倍は稼げるだろうけど、月末にどれだけ残る？下手したら赤字になるかもしれない。ただね、確かなのは、残るにしても出て行くにしても大変なことには変わりないってこと。どっちを選ぶにしても、ものすごい覚悟がいるんだ」

その四百ユーロの仕事というのは、外国人向けのイタリア語教師である。サハラ砂漠を横断し、リビアの収容所を経由し、〈死のボート〉で地中海を渡ってイタリアに上陸した者たちの一団が、少子化で閉鎖されていた町の幼稚園に保護されているのだ。

住民がよそへ出て行かざるをえないところに、肌の色も言語も習慣も違う人びとが入ってきたのだから、迎える側の気持ちは複雑であろう。「よりによってなんでここ?」「あいつら、なんでもタダでもらってるくせに不満言ってるばかりで、働きもしない。ひと切れのパンのために外国でこき使われた俺らの親のこと考えてみる。誰が助けてくれたって言うんだ?」アントーニオにはバールでコーヒーをおごってくれる親切な男たちも、よそ者には厳しい。「彼らも同じ人間じゃないか」そう言い残して、彼は毎朝施設に向かう。

だが難民たちの勉強意欲は今一つ。それも無理はない。彼らのほとんどは正式に滞在許可ができれば、フランスやオランダ、フィンランド、ドイツといった、よりよい生活ができそうな国へ行くつもりなのだ。だからイタリア語よりはむしろドイツ語を学ぶか、英語やフランス語に磨きをかけたほうがためになると思っているのだろう。そんなクラスでただ一人、熱心に授業を受けていたのがソマリア出身のサーラ。とびきりの美人で聡明な彼女に、アントーニオはひそかに（と本人は思っているが、誰の目にも明らか）恋心を抱いている。

ところがある日、サーラが施設から姿を消してしまったから一大事。彼女を探してアントーニオはカラブリアのあちこちに車を走らせる。悪臭の漂うクロトーネの国鉄駅。アフリカ人のホームレスが錆びついた貨物車を寝床にしている。オレンジの収穫期になると多くの人々が働きに来るロザルノの果樹園。奴隷のように搾取されている外国人労働者と地元住民との衝突が起きた場所でもある。ありあわせの材料で建てられたバラックに何千という移民が暮らすサン・フェルディナンド。死者をだした火事の残骸が目につく。ミニスカートの女たちが立ち並ぶコリリアーノの国道。アフリカからの旅費をブ

ローカーに返済するため、ここで売春を強要されているのだ。アントーニオは社会の陰に生きる者たちのあいだにサーラの姿を探す。

彼女はどこにもいない。もうお手上げか。諦めかけたそのとき、アントーニオに一つの情報がもたらされる。「その村の名前は? リアーチェ?」



【リアーチェの村の看板】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Domenico_Lucano

リアーチェ。

本当のことを言えば、サーラの手がかりはそこにはないし、アントーニオもそこに向かうことはない。物語の展開においてさほど重要とは言えないこの一行に、記事の冒頭からこだわっているのには理由がある。

リアーチェはカラブリア州の南の端、ジャスミン海岸に並ぶコムーネの一つ。リアーチェと言えば、1972年に海底で発見された古代ギリシアの戦士〈リアーチェのブロンズ像〉。現在はレッジョの考古学博物館に収められていて、カラブリア州の観光大使のような存在になっている。また、リアーチェの守護聖人であるコズマとダミアーノは小アジアの人。言い伝えによると、三世紀、船旅に疲れてリアーチェに上陸

したこの双子の医師を、村の人びとは温かく迎え入れたという。

1998年夏、迫害を逃れてイラク、シリア、トルコからやって来たクルド人の帆船がリアーチェの沖にあらわれたときも、毛布や食料をもって駆けつける多くの人びとがいた。当時四十歳だったミンモ・ルカーノもその一人。仕事で暮らしていたトリノから、生まれ故郷にUターンしてきたばかりだった。「この難民たちが、リアーチェをよみがえらせてくれるんじゃないか。彼らの助けを借りて、もういちどリアーチェを子どもの笑い声がきこえる場所にするができるんじゃないか」大国の政治に翻弄される犠牲者を目にし、そんな夢を抱くようになった。

2004年に村長になったミンモは、北イタリアや外国に持ち主が移住し、半世紀も放ったらかしになっていた空き家を、難民たちに提供しはじめた。そして国からおりる〈難民一人あたり一日35ユーロ〉を賢く使い、託児所、学校、オリブオイル製造所、工房、救護センターなどをつくった。

ミンモが目指したのは、難民を積極的に受け入れ、その自立を助けながら、村民にも恩恵がまわる、健全な経済システムをつくること。それはドランゲタ（カラブリアのマフィア）との闘いでもあるから、知恵と勇気が試される大事業である。

現在、リアーチェの住民の四人に一人が外国人。伝統工芸や農業の担い手になっている者もいれば、多国籍料理のレストランで料理の腕をふるう者もいる。村じゅうに祝福されて結婚式をあげる異民族カップルも生まれた。ミンモは三期連続で市長に選出され、2016年にはアメリカの雑誌*Fortune*で、世界のもっとも偉大なリーダーの一人として名があがるほどになった。

「人生におけるマエストロは？」という問いにミンモは、マフィアを告発し、マフィアに殺害された（映画『ペッピーノの百歩』の）ペッピーノ・インパスタートやドン・プリージ、精神病院を廃絶したフランコ・バザーリア、パゾリーニ、〈解放の神学〉の神学者たちの名をあげる。リアーチェの地域通貨に印刷されているガンジーやチェ・ゲバラ、キング牧師、ネルソ

ン・マンデラの肖像も、ミンモが理想とする世界のありようを雄弁に語っている。

ミンモが取り組んできたこの事業は〈リアーチェ・モデル〉と呼ばれ、カラブリアの他のいくつかの村でも導入されている。高い失業率とマフィアに悩まされている、イタリアでもっとも厳しい状況にある地方で、規模こそ小さいが大きな可能性をもつ〈ユートピア〉が実現されたのだ。リアーチェは、難民サーラに恋するアントーニオのような者にとっては希望の光であろう。（もし恋が成就したとして）二人の未来の生活にも夢をつないでいくことができるかもしれない。反対に、極右ともポピュリストとも形容される現政権にとっては脅威であろう。〈まずはイタリア人〉というのがスローガンで、「もうこれ以上よそ者にいい思いはさせないぞ」ということだから。

排外主義的な雰囲気広がるのを肌で感じるなか、リアーチェの村長ミンモ・ルカーノが逮捕されたというニュースを聞いたときには、ショックで言葉を失った。外国人の不法滞在を幫助した疑いがあるという。小説が書店に並ぶ数日前のことで、その衝撃的な出来事の意味をまだ捉えられないでいるときにこの本を読んだものだから、あのなんでもない一行からしばらく目が離せなくなってしまったのである。

<参考文献>

- Carmine Abate, *Le rughe del sorriso*, Mondadori, 2018.
- Tiziana Barillà, *Mimi Capatosta, Mimmo Lucano e il modello Riace*, Fandango Libri, 2017.
- Francesco Merlo, (intervista) *Lucano "L'odio contro Riace la sta rendendo più viva i fondi privati ci salveranno"*, la Repubblica, 21 ottobre 2018.

(元当館スタッフ)

わたしとロダーリ③

ベファーナを待つ子ども達

竹田 理乃

お正月といえば、門松に鏡餅。お重にはおせち。京都なら白味噌のお雑煮。冴えた空気に拍手の響く清々しい初詣。お屠蘇や御神酒にふわふわする大人たちからお年玉をいただきながらのお説教のあれこれ。あとは羽子板や凧あげ、百人一首で遊べば、日本の子どもの古典的な年明けとしては、百点満点のできばえでしょうか。私がほんの小さかった頃には、まだ三が日に出かける催しもなくて、そんな調子だったと思うのですが、最近はいろいろと賑やかなようで、今どきの子ども達はもっと忙しいのかも知れません。



【ボローニャのイルミネーション】

出典：https://bologna.repubblica.it/cronaca/2018/12/01/foto/a_bologna_sara_tre_volte_natale_le_luminarie_dedicare_a_lucio_dalla-213150771/1/#1

年の瀬から“お正月”の気配が迫る日本とは違って、イタリアの年明けはクリスマスと一続き。冬の始めから街を彩り始めるイルミネーションも、新約聖書に登場する東方の三博士が、生誕したばかりのキリストのもとへ、黄金、乳香、没薬という三種類の宝物を持ち、輝く星を追って礼拝に駆けつけたことを祝う、御公現祭

エピファニアの行われる1月6日まで輝き続けます。つまり12月末から1月の最初の週末までは、小さな街だと軒並みお店が閉まっていることもあるので、旅行者は計画のときに気をつけなくてははいけません。

クリスマスに子ども達が待ちわびる人物といえば、向こうでもまずはサンタクロース。トナカイの牽くソリに乗ってやって来る、赤い服に白い髭のおじいちゃんのイメージは、日本に定着しているものと同じですが、名前だけはバッポ・ナターレ (Babbo Natale) とイタリア風になって親しまれています。それとイタリアにはもう1人、クリスマスのお祭りの最後の朝にプレゼントを持ってきてくれる人物がいます。

それがエピファニアの前夜にやって来てくれる、魔女のベファーナ (Befana) です。いかにも楽しげな様子のサンタクロースと比べて、一般的にベファーナはなんだか不気味な雰囲気、貧しげな身なりをしたおばあちゃんの姿で描かれます。悪い子には知らんぷりするサンタクロースとは違い、ベファーナはいい子にはお菓子やオモチャを、悪い子には石炭を置いていくという、あからさまなところがあるからでしょうか。私もいたずらっ子だった過去があるので、もしも日本にベファーナがいたらと思うと、なんだかソワソワしてしまいます。いくら枕元にあるのが、一見石炭のような体(てい)の、黒いリコリス菓子だとしても、魔女に「おまえは去年、悪い子だったね」なんて指摘されてしまうのは、ちょっと怖かったらと思います。

ともかくにも、贈りものをくれるベファーナは、イタリアの子ども達にとって馴染み深い存在。国民的な児童文学作家ジャンニ・ロダーリにとっても、欠くべからざる題材でした。

ベファーナの登場するロダーリ作品といえば『青矢号の冒険』が有名ですが、この長編小説のベファーナは(ロダーリ世界の住人らしく)やや風変わりなうえに、違った角度からも改めて触れてみたくなるような、興味深いキャラクターなので、今回は「こんなお話もあります」とご紹介するだけにしておきたいと思います。

誠実で勇敢ないじらしい少年とかわいくて一途な忠犬が主人公の、風刺のぴりっときたファンタジー小説で、登場人物のほとんどは、人間に秘密で冒険に出かけるおもちゃ達。読みやすい和訳も出ているので、まだ身近におもちゃがある年代のお子さんへのプレゼントにぴったりです。大人も満足できる笑いあり涙ありの物語は、イタリア文学への入り口としてもおすすめ。さまざまなキャラクターが登場するので、読書友だちと「どの子が好きだった？」と報告会を開くのも楽しいかも知れません。ちなみに私のお気に入り、美しく心優しいばら色のお人形のエピソードです。



【『青矢号の冒険』表紙】

出典：<https://www.amazon.it/freccia-azzurra-Gianni-Rodari/dp/8879268724>

ロダーリが書いたベファーナのお話のなかでも、日本で特に気軽に読めるものといえば『ベファーナ論』でしょうか。関口英子さんの翻訳で光文社古典新訳文庫から出ている「猫とともに去りぬ」に収録されています。本屋さんでも手に入りやすいですし、電子書籍も出ています。

なんだか「論」なんていう字がついていると、身構えてしまいそうになりますが、この作品は遊び心あふれる短編小説。そのなかでロダーリはベファーナという存在を、魔女の《ほうき》、贈りものを入れる《ずだ袋》、みずぼらしい身なりに含まれる《おんぼろ靴》という3つの特徴から捉え、それぞれにまつわるお話を展開してくれます。

サンタクロースはひとりで世界中を回れるのか、それとも複数人いて地域ごとに手分けしているのか。クリスマス・イブの夜については、今までさまざまな空想がくり広げられてきました。ロダーリの見解によると、同じく一晩のうちに、イタリア中に散らばる子ども達へ贈りものを届けるベファーナは、かなり大がかりな分業制。ベファーナという存在は、彼女たちの国にたくさん暮らしていることになっています。

十人十色のベファーナや人間が、みんなで集まって世間を作っているわけですから、そこには流行もトラブルも、悪巧みも優しさも表れてきます。そんな彼らが賑やかに活躍する『ベファーナ論』は、文庫本でたった15ページの短さとは思えないほどの、しっかりとした読み応えのある作品です。

この『ベファーナ論』に関連して、前々回からご紹介しているエッセイ集「ファンタジーの文法」に、作者ロダーリ自身が創作に使用した手法を解説した『ベファーナの分析』という章がもうけられています。小説作品に採用されなかった設定がいくつも紹介されていて、それだけでも気持ちよく笑わせてもらえるうえに、自分でもなにか書けるのではないかという勇気が湧いてくるので、暗くて厳しい冬を楽しく乗り切るための、頭と心に効くビタミン剤としてもうってつけです。

ベファーナを巡るドタバタ劇に、くすっと笑ってページを閉じるまえに、ひとつロダーリらしい眼差しを、お話のなかから取り出してみたいと思います。ロダーリは『ベファーナ論』のくりに、冷笑的な研究者を登場させて「ベファーナは、よい子にはプレゼントを持ってくるが、悪い子には持ってこないということが、ど

こにも書かれていない」と指摘させます。それに対してロダーリとおぼしき《作者》は「子どもというものは一人残らずいい子ばかりだと、いまここで誓ってください。なかでも、貧しくてプレゼントももらえないような子は、みんないい子ばかりです」と強く主張します。

第二次世界大戦へ向かう時代から、復興期にかけての時代に青春を送ったロダーリにとって、貧困は身近で切実なテーマでした。世の中にはどんなにいい子にしている、お菓子ひとつもらえない子ども達もいれば、どんなに子どもを愛している、贈りものを用意してあげられない大人達もいます。また親に頼ることのできない子ども達も、子どもと一緒にいることができない大人達もいます。自分ではどうしようもない理由によって子どもが傷つくのは、残念ながら今に至ってもよくあることですが、それを看過するわけにはいきません。ロダーリは数多くの物語をハッピーエンドに導いた職業作家であると同時に、ことばの力で社会悪に立ち向かうひとりの正義漢でもありました。その傾向は、ロダーリが作家として生み出した物語世界の価値観としてだけではなく、読者との接触を通して創作の手法を教授し、自ら物語る力を与えようと努力した、教育家としての側面にも現れています。

創作の効用はさまざまな形で現れますが、ひとつには苦い現実を飲みくらすためのオブラートのような働きが期待できます。創造力さえ自由になれば、贈りものを持ってくるはずだったベファーナが、家を間違えることもありますし、彼女のずだ袋に大きな穴が見つかることだってあります。そういうことなら、仕方ない。たとえばベファーナが来なくても、子どものせいではありません。

もちろん、これは応急処置です。小さな火のなかに幸せな光景を描いたマッチ売りの少女は、創造力を使ってつかの間の安らぎを得ることに成功しましたが、最後には力尽きました。来ないベファーナを待つ子ども達には、その理由を物語化して楽しむ方法以上の、もっと即物的な支援が必要です。ですがその支援が届くまで、子ども達の自尊感情を守ることができるならば、

応急処置としては十分でしょう。そして、こうした心の応急処置が必要になるのは、子どもに限った話ではありません。息苦しいことの多い現代、「ポジティブに考えよう」という言葉はよく耳にしますが、実践するのは難しいもの。ロダーリ先生のアドバイスも、まだまだ役に立ちそうです。



【『青矢号の冒険』表紙】

出典：<https://www.amazon.co.jp/>より

(当館語学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>